

社会包摂を志向したアウトリーチコンサートにおいて演奏家が求められること

— 「やりがい」と「難しさ」に関する自由記述に着目して —

東京藝術大学 船越 理恵

東京藝術大学 萩原 史織

1. 研究の背景と目的

近年、包摂的環境の実現にむけた文化芸術活動が社会的な広がりを見せる中、筆者らはこれまで、子どもをとりまく社会課題と対峙した音楽実践として、子ども食堂をはじめとする地域の子どもの居場所で実施されるアウトリーチコンサートの取り組みに着目してきた(2022, 2024)。拙稿(2022)では、子ども食堂や学習支援拠点といった子どもの居場所で開催されるライブコンサートには様々な参加者それぞれにおける「聴き方」を受容し、誰もが排除されない空間を創出する一面があることや、ライブコンサートへの参加を通じて子どもの「やる気」が引き出されることを指摘している。ライブコンサートに見取ることのできたこうした事柄は、その内容から推察するに、子どもの居場所が担う社会的役割に対し、多分に資するものである。

音楽アウトリーチに関する先行研究を概観すると、様々に分類されるテーマの中でも、ことアーティスト育成に関する研究は、その蓄積が希薄であるとされる(梶田 2023)。とりわけ、子どもの居場所でのコンサートを含む、社会包摂の視点を有したアウトリーチ(以下、社会包摂型アウトリーチ)を担う演奏家の育成ならびに活動支援に関する議論は、筆者らの知る限り、過去に展開されておらず、未着手に等しい。そこで本稿では、社会包摂型アウトリーチを担うアーティスト育成研究の足掛かりとすべく、子どもの居場所でのアウトリーチコンサートに取り組む音楽家たちが実践のなかでどのようなやりがい、そして難しさを感じているのかを明らかにする。分析結果をふまえて考察においては、やりがいと難しさを包括的に捉えることで、社会包摂型アウトリーチの場において演奏家に求められることを整理し、育成および活動支援のあり方について示唆を導きたい。

2. 研究の方法

2-1. アンケートの概要と調査対象

2024年2月12日から2月24日にかけて、オンラインにて音楽アウトリーチに関するアンケートを実施した。アンケートの詳細は拙稿(2024)に預けることとする。

アンケート調査は、一般財団法人「100万人のクラシックライブ」の協力を得て行った。2015年に設立され、アウトリーチによる音楽ライブコンサートを様々な地域・場所で展開してきた当財団法人では、2020年より「子どもたちに『音楽を届ける』プロジェクト」(以下、子どもプロジェクト)をスタートさせており、子ども食堂や児童家庭支援センター等の子どもにまつわる包摂的な環境の実現を志向した場におけるアウトリーチ活動を全国で展開している。

調査対象は、社会包摂型アウトリーチとしての子どもプロジェクトでのアウトリーチと、実施目的において社会包摂に関する特段の言及をしていない従来型アウトリーチ、双方の経験を有する演奏家とし、調査対象としての条件に該当する当財団法人の登録アーティストへアンケート調査への協力を依頼した。アンケートの際には回収データの質を担保するために、アンケートページの冒頭に、調査目的と調査協

力条件を記載した。回収した85人の回答のうち、本研究では有効回答76名分のデータを分析の対象とする。

2-2. 分析の手続き

自由記述「アウトリーチを通じてのやりがい」、「アウトリーチを通じての難しさ」、「子どもプロジェクトを通じてのやりがい」、「子どもプロジェクトを通じての難しさ」の回答項目を対象に、KJ法（川喜田 1967）とテキストマイニングを併用し、言語として表出された内容を分析した。KJ法およびテキストマイニングを行うに際しては、自由記述の各回答文章をあらかじめ意味のまとまり毎に切片化した。一つの回答に複数の意味の記述が読み取れた場合は、内容毎に分割した。

KJ法では、文章全体の意味内容を把握しながら内容を整理できるという利点がある一方で、解釈の恣意性や解釈に至った過程が不透明であることが留意点として指摘される。他方で、定性的な特徴をもつテキストを定量的に分析する手法であるテキストマイニングは、分析者の意図があまり介在せずにデータを量的に分析し可視化できるという利点をもつ一方で、解釈上は重要な言葉が頻度の低さ故に見落とされてしまったり、文脈の中におかれた言葉の意味の解釈は行えないという限界が指摘されている（町田 2019）。そこで、本研究においては、KJ法とテキストマイニングの分析を併用し、両者を補完しながら考察することで、記述の厚みを増すことができると考える。

KJ法での分析に際しては、分析支援ツール「IdeaFragment2」を使用してカテゴリの生成を行い、意味内容の親近性を軸にグルーピングした。テキストマイニングによる分析は、ユーザーローカル社の提供するAIテキストマイニング (<https://textmining.userlocal.jp/>) を用い、分析に際しては、自由記述のテキストデータを読み込んだ上で、文意を変えない範囲で類似した語句を統一した表現に変更した。テキストマイニングについて、本稿では、以下3点、①ワードクラウド（テキストデータ全体像の俯瞰図）、②頻出単語（スコア順）、③階層別クラスタリングの分析結果を取り上げる。これら3点の結果を複合的に解釈することで、それぞれのテキストにおける特徴を導き出せると考える。

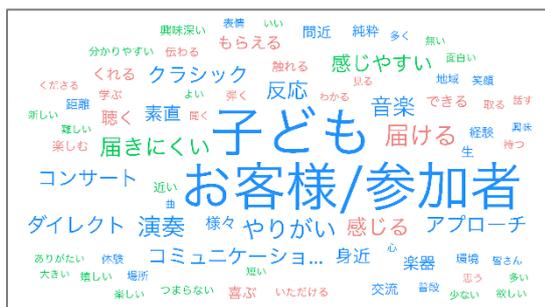
3. 分析結果

3-1. やりがいに関する自由記述

(1) 社会包摂型アウトリーチ

① テキストマイニング

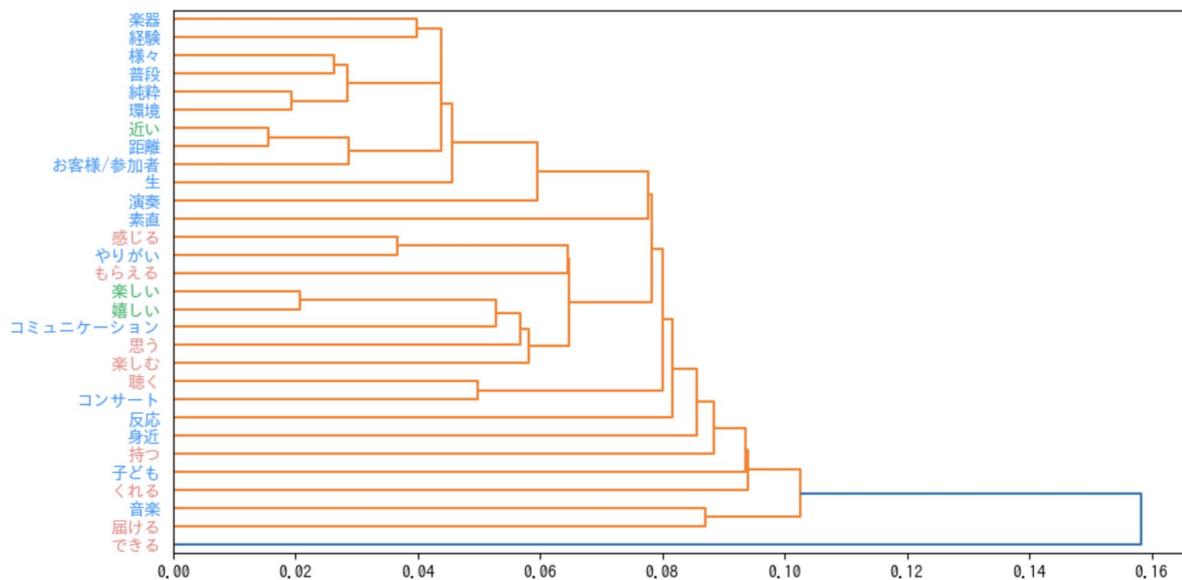
(i) ワードクラウド



(ii) 頻出単語 (スコア順)

■ 名詞	スコア	出現頻度	■ 動詞	スコア	出現頻度	■ 形容詞	スコア	出現頻度
子ども	87.94	59	届ける	4.91	8	届きにくい	3.40	1
お客様/参加者	85.16	8	ふれあえる	3.67	1	感じやすい	1.62	1
やりがい	13.91	7	担える	2.78	1	近い	0.31	5
演奏	12.38	14	感じる	2.35	21	興味深い	0.22	1
音楽	10.01	25	うかがえる	1.79	1	分かりやすい	0.12	1
反応	6.68	23	立ち会える	1.18	1	つまらない	0.10	1
コミュニケーション	4.94	6	投げかける	1.12	1	嬉しい	0.09	6
クラシック	4.76	5	ひらける	1.11	1	楽しい	0.08	6
アプローチ	4.58	4	聴く	0.94	12	よい	0.03	4
コンサート	4.19	9	もらえる	0.85	9	難しい	0.03	2
ダイレクト	3.89	4	見受ける	0.73	1	短い	0.03	1
素直	3.36	10	くれる	0.69	24	面白い	0.02	2
身近	3.08	5	読み取る	0.66	1	ありがたい	0.02	1
楽器	2.48	7	できる	0.61	22	少ない	0.01	1
様々	2.27	5	喜ぶ	0.58	5	大きい	0.01	1
間近	1.60	3	飛び跳ねる	0.54	1	新しい	0.01	1
交流	1.55	4	芽生える	0.50	1	無い	0.00	1
親御	1.51	2	見入る	0.41	1	多い	0.00	1
純粋	1.38	5	深める	0.34	1	欲しい	0.00	1
生	1.27	7	作り上げる	0.32	1	いい	0.00	1
ならでは	1.20	2	触れる	0.30	3			

(iii) 階層別クラスタリング



スコア (重要度) の高い順に頻出単語を見てみると、名詞では「子ども」「お客様/参加者」「やりがい」、動詞では「届ける」「ふれあえる」「担える」、形容詞では「届きにくい」「感じやすい」「近い」と続いている。なお、形容詞における第1位の「届きにくい」は、「個人では届きにくい場所で演奏できる」というような文脈で使われていた。

上位に現れているそのほかの単語を見てみると、名詞では「コミュニケーション」「アプローチ」「ダイレクト」「素直」「交流」「親御」「純粋」、動詞では「うかがえる」「立ち会える」「投げかける」「ひらける」「見受ける」「読み取る」「飛び跳ねる」「芽生える」「深める」、形容詞では「感じやすい」「分かりやすい」「つまらない」などが見てとれる。

階層別クラスタリングによる図を見ると、もっとも低い値 (0.02付近) で結合している単語は「近い」と「距離」であり、他方、もっとも高い値 (0.16付近) で結合している単語は「できる」であった。「できる」という単語以外は全て同じオレンジ色で配色され、値0.10付近で結合しており、これらの単語は関係の近いものとして位置していることがわかる。

② KJ法

6 カテゴリー及び17の小カテゴリーが生成された。クラシックを聴いてもらえる、生演奏を体験してもらえる、音楽を身近に感じてもらえる、リーチしづらい地域にも音楽を届けられるなど音楽アウトリーチの意義を実感しつつ、子どもにとってより良いコンサートを日々追求し、客席からの反応にヒントを得ながら、試行錯誤を重ねるプロセス自体にやりがいが見出されている。また、音楽を通じて子どもの素直な心の動きが感じられること、時に子どもの発達や成長にかかわれることも醍醐味となっている。

社会包摂型アウトリーチとしての固有性が見とれるカテゴリーは「社会的包摂の実現に関与できる」である。社会包摂型アウトリーチへの参加は、地域の子どもの食堂に足を運び、普段出会えない子どもたちとの交流を深め、現代の子どもを取り巻く社会問題に触れる経験であり、演奏家自身が一市民として、視野を広げる活動になっている。音楽を通じて、自身を社会に役立てられることの充実感を感じている。

アウトリーチの意義の実感	<ul style="list-style-type: none"> ・クラシックを聴いてもらえる 敷居の高さを感じることなくクラシックに対して興味をもって聴いてもらえる。 ・生演奏を体験してもらえる 生の音楽、楽器の迫力を感じてもらえる。 ・身近に感じてもらえる 体育館や学校など、日常生活の中にある身近な場所に音楽を届けられる。 ・アクセスしづらい地域に音楽を届けられる 個人では探しきれない、リーチしづらい地方・地域でコンサートができる。
より良いコンサートの模索	<ul style="list-style-type: none"> ・より良いコンサートを目指して模索する 子どもにとってより楽しく、面白く、発見のあるコンサートを目指し、客席からの反応をもとに、プログラムやアプローチの仕方、トークの仕方など、様々な工夫をほどこせる。
客席の反応を直接受け取れる	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションできる 客席との距離が近く、話をしながら和気藹々とコンサートを進行させられる。 ・生の反応を受け取れる 客席との距離が近い分、ダイレクトな反応をもらえる。
子どもの育ちへの関わり	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽への興味を育てる 子どもが身近にクラシック音楽や楽器について触れることで、新たな発見や楽しみを見つけてくれる。 ・心の成長・発達に携われる 好奇心を刺激したり、感性を育てるなど、子どもの心の成長や発達に働きかけることができる。
子どもの心の動きを直に感じられる	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しんでくれる リズムに合わせて飛び跳ねたり、メロディを歌ったり、子どもが音楽を聴き、純粋に喜んだり、遊んだりしている様子を目にする事ができる。 ・子どもの笑顔・良い表情 演奏を聴いて、目を輝かせたり、笑顔になったりする子どもをみることが出来る。 ・素直な反応を受け取れる 大人にはない、音に対する子どもの純粋で素直な反応をみてとることができる。
社会的包摂の実現に関与できる	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちとの出会い・交流 普段はなかなか出会えない子どもたちとに出会いや交流の機会をもてる。 ・自分も学べる ただ音楽を届けるだけでなく、現代の子どもを取りまく問題や境遇を知ることができる。 ・音楽による癒し・ケア 短い時間でも、しがらみを忘れて、自由に音楽を楽しんでもらえる時間を提供できる。 ・子ども食堂で実践できる 実際に、地域の社会的包摂を目指した環境に足を運び、演奏ができる。 ・社会的意義が感じられる 結果的に社会の役に立っているのではないかという実感がもてる。

従来型アウトリーチにおけるやりがいに関するテキストについて、スコアの高い順に頻出単語を見ると、名詞では「お客様/参加者」「やりがい」「演奏」、動詞では「感じる」「聴く」「届ける」、形容詞では「近寄り難い」「られやすい」「幅広い」と続いている。なお、形容詞における第1位の「近寄り難い」は、「最初は近寄り難いと思われているなど雰囲気でわかるが・・・」というような文脈で使われている。

上位に現れているそのほかの単語を見てみると、名詞では「コンサート会場」「聴衆」「コミュニケーション」「演奏家」「演奏会」、動詞では「感じとれる」「喜ぶ」「触れ合える」「作り上げる」「持ち寄る」「輝く」「若返る」、形容詞では「幅広い」「取りやすい」などが見てとれた。

階層別クラスタリングにおいて、もっとも低い値(0.025以上)で結合している単語は「近い」と「距離」であり、これは社会包摂型と同じ結果であった。一方で、もっとも高い値(0.175以上)で結合している単語は「反応」で、そのすぐ下で結合している単語は「感じる」であった。本図では、線が5色に配色されており、5つ階層のクラスタとして分析された。

② KJ法

5つのカテゴリ及び15の小カテゴリが生成された。より質の高いクラシック音楽をコンサートホールを出た外の世界に広げたい、という動機の強さが読み取れる。ホールとは異なり客席との距離が近いからこそ、客席の反応を直接に感じながら、聴き手と深くコミットできることにやりがいが見出されている。さらに音楽を届ける活動を通じて、音楽が持つエンパワメントする力を、実践における多様な瞬間に見出しており、そうした気づきが音楽アウトリーチを実施する意義の実感に転化している。

<p>アウトリーチの意義の実感</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・クラシックを身近にする 敷居が高いと思われがちなクラシック音楽も身近に感じてもらうことができる。 ・鑑賞機会の創出 普段はコンサートホールに行くことができなかつたり、生演奏を聴く機会がない人たちに音楽を届け、喜んでもらえる。
<p>聴き手と深くコミットできる</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーション 聴き手の間近で演奏し、コミュニケーションしながらの演奏ができることで、音楽に積極的に参加してもらえる。 ・オーダーメイドで応えられる 年齢層、環境、それぞれの集団が示す興味など、届け先に合わせて工夫を持ち寄りことで、喜んでもらえる。 ・音楽を通じた出会い・交流 幅広い世代の聴き手と音楽を通じて出会い、心と心の交流が感じられる。 ・聴き手との一体感 会場と奏者が一体となれる瞬間が生まれる。奏者と客席の垣根がなくなり、ライブのような雰囲気を楽しめる。
<p>客席の反応を直接受け取れる</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・演奏への感想・感謝 演奏に対する、新鮮且つリアルな聴き手の感想・感謝を受け取ることができる。 ・届いた実感 客席の演奏に対する反応がわかる。 ・演奏に対するリアクション コンサート会場よりもダイレクトに、客席の素直な反応を感じとれる。

音楽がエンパワメントする力の実感

- ・好奇心への刺激
身近にクラシック音楽や楽器について触れることで、新たな発見や楽しみを見つけてくれる。
- ・活力の促進
世代に関わらず、演奏を聴くことで目の輝きが増す、表情が生き生きとする。
- ・楽器演奏に対する興味喚起
自身のアウトリーチコンサートをきっかけに、楽器を手に取るようになったり、別のコンサートに足を運ぶようになる。
- ・音楽による癒し・ケア
客席、特に子どもが、体を動かして一緒に参加している様子を見ることで、音楽で心のケアができていくという実感がわく。
- ・生活文化の向上
コンサートに来た方のコミュニティを広げるきっかけをつくれる。

演奏家としての成長

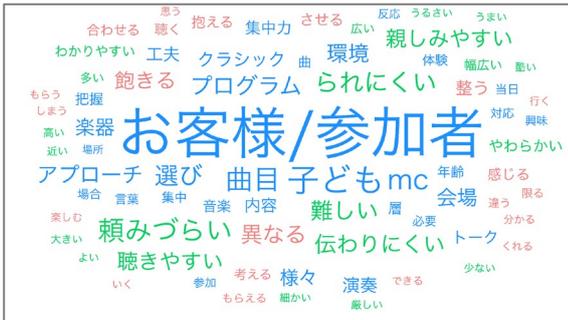
- ・学びのきっかけ・動機づけ
アウトリーチでは、参加者の方との距離感が近く、どんな風に演奏を聴いてくれているかがわかる。より心に届くように演奏やMCなどを工夫しようと意欲が湧く。

3-2. 難しさに関する自由記述

(1) 社会包摂型アウトリーチ

① テキストマイニング

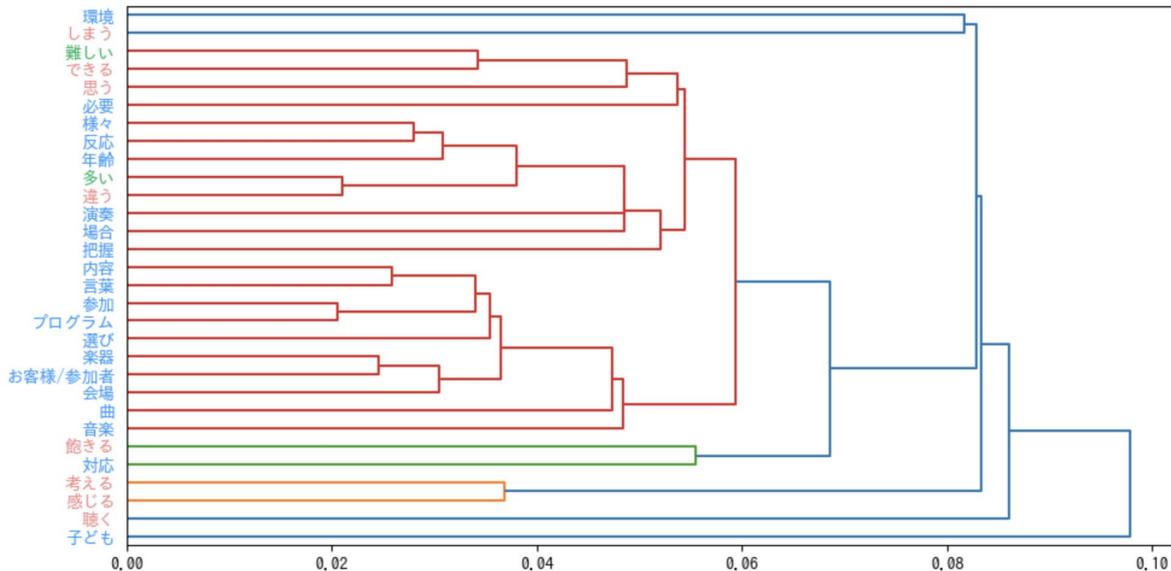
(i) ワードクラウド



(ii) 頻出単語 (スコア順)

■ 名詞	スコア	出現頻度	■ 動詞	スコア	出現頻度	■ 形容詞	スコア	出現頻度
お客様/参加者	61.38	6	張り巡らせる	3.12	1	頼みづらい	4.54	1
子ども	22.00	26	触れ合える	1.59	1	られにくい	3.22	1
mc	13.58	4	異なる	1.52	3	難しい	2.01	16
曲目	13.40	4	取り巻く	1.13	1	伝わりにくい	1.50	1
選び	8.29	8	聞き出す	0.98	1	親しみやすい	1.16	1
プログラム	5.24	6	噛み砕く	0.98	1	聴きやすい	1.11	1
環境	3.84	13	飽きる	0.95	6	やわらかい	0.40	1
財団	3.10	2	生かせる	0.92	1	わかりやすい	0.28	2
臨機応変	3.06	2	立て直す	0.80	1	幅広い	0.26	1
乳児	3.05	2	整う	0.60	2	多い	0.19	8
アプローチ	2.80	3	たよる	0.59	1	広い	0.15	2
会場	2.65	12	努める	0.48	1	細かい	0.05	1
楽器	2.48	7	させる	0.46	5	大きい	0.04	2
様々	2.27	5	ほぐす	0.45	1	よい	0.03	4
クラシック	1.93	3	動き回る	0.45	1	うるさい	0.03	1
演奏	1.90	5	抱える	0.39	3	厳しい	0.02	1
工夫	1.82	3	遣う	0.39	1	酷い	0.02	1
多様	1.81	2	つめる	0.37	1	近い	0.01	1
内容	1.52	10	感じる	0.35	8	少ない	0.01	1
集中力	1.42	3	聴く	0.32	7	うまい	0.01	1
トーク	1.32	5	合わせる	0.28	4	高い	0.01	1

(iii) 階層別クラスタリング



社会包摂型アウトリーチにおける難しさに関するテキストについて、スコアの高い順に頻出単語を見てみると、名詞では「お客様/参加者」「子ども」「MC」、動詞では「張り巡らせる」、「触れ合わせる」、「異なる」、形容詞では「頼みづらい」、「られにくい」と続いている。なお、形容詞における第1位の「頼みづらい」は、具体的な記述を見ると、「細かいことを確認したい場合に、財団を通さないと確認できず、財団の労力や時間を思うと頼みづらい」というような文脈で使われていた。

上位に現れているそのほかの単語を見てみると、名詞では「曲目」「プログラム」「環境」「臨機応変」「アプローチ」「工夫」「集中力」、動詞では「取り巻く」「噛み砕く」「飽きる」「立て直す」「整う」「ほぐす」「動き回る」、形容詞では「伝わりにくい」「親しみやすい」などが見てとれた。

階層別クラスタリングによる図を見ると、線が4色に配色されている。もっとも低い値(0.02付近)で結合している単語は「参加」と「プログラム」、「多い」と「違う」であり、もっとも高い値(0.10以下)で結合している単語は「子ども」であった。

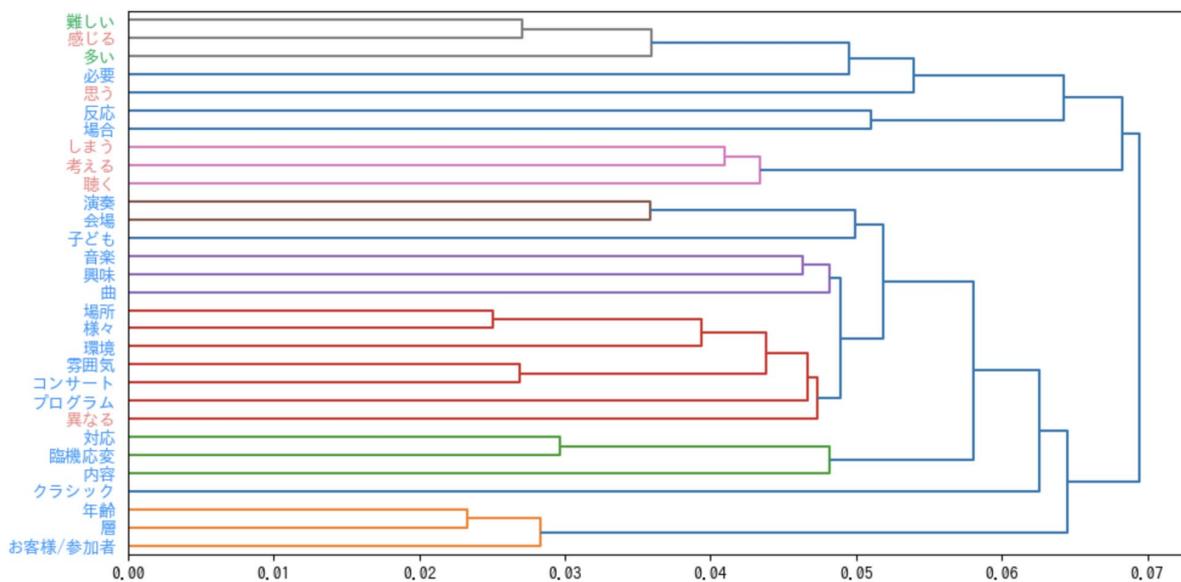
② KJ法

4つのカテゴリ及び14の小カテゴリが生成された。やりがい同様、対象が子どもであるがゆえの難しさに言及されており、その場その場において臨機応変に対応をしながら、コンサートの終わりまで飽きさせることなく、音楽に対する興味を保たせ続けることの難しさを強く感じていることがわかる。社会包摂に関連した言及は「子どもの社会問題に対し演奏家としてできることの模索」に読み取れた。全般的に、どのように子どもと向き合い、関わっていくかについて確信がもてず、模索する様子が窺われる。自身の言動が適切であったのか、自身の演奏が届くものであったのか、反応をつかみきれず、不安を抱えていることが示されている。また、それぞれの子どもがおかれた状況を鑑み、個々に寄り添ったきめこまやかなコミュニケーションを理想としつつも、プログラミングをはじめ企画の練りこみにおける限界を感じており、理想と現実との乖離に悩む様子も見てとれた。

(ii) 頻出単語 (スコア順)

■ 名詞	スコア	出現頻度	■ 動詞	スコア	出現頻度	■ 形容詞	スコア	出現頻度
お客様/参加者	173.27	15	異なる	5.30	6	繋がりがづらい	4.14	1
臨機応変	16.41	6	もたせる	1.55	1	難しい	2.53	18
聴衆	11.90	3	もたれる	1.06	1	幅広い	2.01	3
演奏	10.87	13	かき消す	1.05	1	馴れ馴れしい	0.69	1
クラシック	10.56	8	閉ざす	1.02	1	わかりづらい	0.63	1
mc	9.08	3	寄り添う	0.94	2	奥深い	0.54	1
曲目	8.94	3	感じる	0.78	12	やりにくい	0.42	1
プログラム	8.86	7	整う	0.60	2	親しい	0.35	1
客層	8.64	4	緩める	0.59	1	多い	0.24	9
子ども	5.43	12	聴く	0.42	8	薄い	0.17	2
層	4.80	9	保つ	0.42	2	広い	0.15	2
対応力	4.76	2	留まる	0.40	1	大きい	0.10	3
対象者	4.53	2	求める	0.37	4	わかりやすい	0.07	1
年齢	3.65	11	決めつける	0.31	1	よい	0.05	5
様々	3.18	6	盛り上がる	0.30	3	狭い	0.05	1
乳児	3.05	2	つかむ	0.30	1	短い	0.03	1
引き出し	2.51	3	利く	0.28	1	いい	0.01	4
コンサート	1.96	6	もらえる	0.27	5	上手い	0.01	1
曲	1.79	18	もつ	0.22	4	少ない	0.01	1
反応	1.61	11	応じる	0.21	1	長い	0.01	1
環境	1.51	8	伝える	0.20	3	うまい	0.01	1

(iii) 階層別クラスタリング



従来型アウトリーチにおける難しさを、スコアの高い順に頻出単語で見ると、名詞では「お客様/参加者」「臨機応変」「聴衆」、動詞では「異なる」、「もたせる」、「もたれる」、形容詞では「繋がりがづらい」、「難しい」、「幅広い」と続いている。なお、形容詞における第1位の「繋がりがづらい」の具体的な記述を見ると、「通常のコンサート以上に労力がかかるが、直接的な収入には繋がりがづらい」とあり、収入面での課題が記述されていた。

上位に現れているそのほかの単語を見ると、名詞では「MC」「曲目」「客層」「対応力」「年齢」「引き出し」、動詞では「かき消す」「閉ざす」「緩める」「決めつける」、形容詞では「馴れ馴れしい」「奥深い」などが見てとれた。

階層別クラスタリングでは、線が8色に配色されていた。もっとも低い値(0.02付近)で結合している単語は「年齢」と「層」であり、もっとも高い値(0.07付近)で大きく2つのカテゴリが結合していた。

② KJ法

6つのカテゴリ及び16の小カテゴリが生成された。課題意識は、質の良いクラシックコンサート

の実現に対して妨げとなりうる要素に向いている。自分にとってベストな演奏の実現に全力で取り組むことができない葛藤と、演奏以外の面での様々な対応への苦慮がみられる。コンサート中には、クラシック音楽への関心が低い聴き手を巻き込みながら、場の雰囲気に応じて臨機応変な対応力が求められ、常に正解がないため、労力が大きいと感じている。また労力に対して収入が見合わず、持続可能性にかけるという懸念を示す声も読み取ることができた。

臨機応変に対応しなければならぬ

- ・ **コンサート中に求められる対応力**
その場の雰囲気に合わせてトークや曲を柔軟に変えるための引き出しが求められる。
- ・ **事前準備の限界**
会場に行ってみないと、客層や会場の雰囲気がわからない。
- ・ **正解がない**
以前に成功したプログラムが次に必ず成功するとは限らず、その時々参加者によって手ごたえが異なる。

演奏家として場の多様性に応じる

- ・ **多様な参加者への対応**
参加目的が人によって様々であることを配慮して曲や言葉をより選ぶ必要がある。
- ・ **幅広い年齢層への対応**
参加者の年齢の幅が大きいため、年齢に合わせた曲選びや話し方ができない。
- ・ **参加者との関係づくり**
コミュニケーションの接点を見いだせず、心を開いてもらえない。
- ・ **参加者からのハラスメント**
嫌味や妬みを受ける。

運営面に関する難しさ

- ・ **主催者／制作側との連携**
主催側とのスムーズなコミュニケーションがとれず、求められていることが把握できない。
- ・ **活動資金／収入面**
労力はかかるが直接的な収入にはつながりにくい。

演奏ファーストにできないことへの葛藤

- ・ **プログラムのパターン化**
有名な曲、派手で盛り上がる選曲に偏りがちで、音楽の幅広さを伝えられない。
- ・ **演奏で勝負できない**
落ち着いた曲や難曲への反応が薄く、弾きたくても弾けない。
- ・ **演奏環境を選べない**
機材の不具合や騒音を受け入れて演奏をしなければならない。

クラシックのコンサートに親んでもらう難しさ

- ・ **演奏面以外の演出も求められる**
MCトークなどで、演奏以外の楽しさを生み出す。
- ・ **コンサートへの関心が低いという前提がある。**
音楽に苦手意識がある参加者が多い状況でも演奏しなければならない。
- ・ **飽きさせない**
最後まで集中して聴いてもらうための工夫や注意をする。
- ・ **クラシックに対する興味の喚起**
クラシックに反応がうすい参加者の興味を引き出さなければならない。

特になし

4. 考察

【社会包摂型アウトリーチならではのやりがい】

テキストマイニングにおける単語出現頻度及び重要度を示すスコアによる分析からは、従来型と比較して、より主体的・能動的な単語が記述されていることを指摘できる。例えば、動詞を見ると、社会包摂型における最上位は、参加者への指向性をもつ「届ける」であるのに対し、従来型では「感じる」という受動的な単語であった。そのほか、社会包摂型で重要度が高いと判断された上位の単語には、「担える」「投げかける」「読み取る」のように演奏家側の主体的な意識が窺える単語が多くみられた。

なお、上位に位置した名詞を比較すると、社会包摂型では、「アプローチ」「交流」のように、対象と関わり、音楽を届け交流することに対する言葉が記述されていた。他方、従来型では、「コンサート会場」「演奏家」のように、演奏家としてコンサートをつくり上げ、聴き手に届けることに対する言葉が見られた。この点からは、コンサートにおける音楽づくりの意識の違いが垣間見える。

また、階層的クラスタリングによる分析からは、社会包摂型では、具体的に何に対してやりがいの実感を得ているのか、従来型と比較して不明瞭であった。従来型では、クラシック音楽を間近で演奏し届けられること、参加者との距離の近さ、などの記述がクラスタ分けされているが、社会包摂型では「子どもに音楽を届けることができる」という大きな傘の中に内包されており、やりがいの実感の具体がクラスタとして分類されていない。

さらに、KJ法による分析からは、従来型にはない社会包摂型ならではの特徴として、子どもの社会問題に触れ、学びを得、視野をひろげることによりやりがいを見出していることが読み取れた。一演奏家としての音楽的興味や関心にとどまらず、社会課題と向き合う一市民として内面の成熟に対し視座がおかれている。

以上をまとめると、社会包摂型アウトリーチのやりがいに関する記述には、演奏家の主体的かつ能動的な意識が垣間見られる。また子どもを取り巻く社会問題に目をむけ、社会との新しい関わり方を切り開こうとするモチベーション、演奏を通じた市民としての内的成長意欲をもって、取り組んでいることが窺えた。一方で、やりがいの実感の具体が曖昧であることが指摘でき、コンサートホールではない場所で、対象との交流を通じた音楽実践を行う場合の意義と評価の視点を演奏家が有する必要がある。

【社会包摂型アウトリーチならではの難しさ】

テキストマイニングにおける単語出現頻度及び重要度を示すスコアによる分析からは、「アプローチ」「楽器」「工夫」「集中力」といった、子どもを飽きさせずにコンサートをつくりあげるための創意工夫に関わる単語が目立つ点が社会包摂型の特徴的であり、参加する子どもを取り巻く環境や、置かれている状況等を把握・想像しながら進めていくことに対して課題意識が向けられていることが窺えた。加えて「臨機応変」など、その場の状況に応じて対応することに関わる単語は、従来型と共通して上位にある。

階層的クラスタリングによる分析では、先の「やりがい」に対する記述と同様、従来型と比較して社会包摂型については、クラスタ分けがされておらず、具体的に何に対して難しさを感じているのが不明瞭であった。

KJ法による分析を通じては「子どもの社会問題に対し演奏家としてできることの模索」というカテゴリーが生成され、カテゴリーに属す4つの小カテゴリーはそれぞれ「子どものおかれた環境に対する理解」「子どもを傷つけない」「子どもと向き合う距離や姿勢をはかる」「子どもに届いているかわからない」であった。これら4つの小カテゴリーからは、演奏家が社会的役割を担う実践の場で直面する難しさを具体的に読み取ることができる。

以上をまとめると、社会包摂型アウトリーチの難しさに関する記述からは、演奏家が、参加する子どもを取り巻く環境・置かれている状況等を強く意識しつつも、実際に、様々な状況に置かれた子どもた

ちと向き合うにあたっての解を有しておらず、それゆえの不安、自信のなさを伴った実践の様子が窺われた。目の前に集まった子どもたちにどのような音楽が届くのかの模索を続ける演奏家の姿が読み取れる。

ここまで考察してきた、やりがいと難しさの両者を改めて包括的に捉えてみると、演奏家においては、子どもを取り巻く社会問題に対する意識や関心が高く、音楽を通じて自身を社会に役立てていくことに意欲的でありつつも、実践の場においては社会的課題への役割を担えている実感に乏しく、子どもたちを前にして自身のやり方に不安を抱く実状が浮かび上がってくる。子どもをとりまく社会問題しかり、社会包摂をめぐる課題については、多くの演奏家がそれまでに培ってきた音楽的素養では対応しきれない側面が多分に含まれていることが推察される。

こうした状況をふまえ、社会包摂型アウトリーチを担う演奏家の育成および活動支援の方向性について思索をするならば、たとえば福祉専門職員をはじめ音楽の「外」の立場にある専門家や有識者から意見や助言を受ける機会を設け、社会包摂型アウトリーチの場におけるパフォーマンスや振る舞いについて、演奏家自身にとって判断の拠り所となる視点を育む策も有効かもしれない。実践を通じて社会と繋がるということについて、よりプラクティカルに検討しうる基準や観点を演奏家自身が持ち合わせられるように促していくことが肝要と考える。

引用参考文献

- 阿部彩 (2011) 『弱者の居場所がない社会—貧困・格差と社会的包摂』 講談社
- エリック・クリネンバーグ (2021) 『集まる場所が必要だ—孤立を防ぎ、暮らしを守る「開かれた場」の社会学』 英治出版
- 梶田美香 (2023) 「音楽アウトリーチのためのアーティスト育成プログラムの開発—長久手市文化の家との連携による実践的アプローチ—」 『名古屋芸術大学研究紀要』 第44巻、pp.149-162
- 上村有平・小野隆洋 (2021) 「音楽アウトリーチが子どもに及ぼす効果—感想文の分析から—」 『山口芸術短期大学研究紀要』 第53巻、pp.15-27
- 川喜田二郎 (1967) 『発想法—創造性開発のために』 中公新書
- 古賀弥生 (2020) 『芸術文化と地域づくり』 九州大学出版会
- 小林美津江 (2011) 「公立文化施設による地域活性化～アウトリーチと社会的包摂～」 『立法と調査』 No.322、pp.86-97
- 砂田和道 (2007) 「クラシック音楽におけるアウトリーチ活動とそれに関わる音楽家養成の課題」 『文化経済学』 第5巻 第3号、pp.87-99
- 東京文化会館 (2020) 『社会包摂につながるアート活動のためのガイドブック』
- 永島茜 (2021) 「音楽アウトリーチ研究の現在：活動が抱える課題の分析と今後の方策 (田中毎実教授 退職記念号)」 『学校教育センター紀要』 第6号、pp.95-108
- 中村美亜 (2021) 「社会包摂につながる芸術とは」、九州大学ソーシャルアートラボ (編) 『アートマネジメントと社会包摂—アートの現場を社会にひらく』 水曜社
- 野呂田理恵子 (2024) 『社会包摂のためのアートプログラム入門』 水曜社
- 萩原史織・船越理恵 (2022) 「子どもの居場所づくりにおけるライブコンサート実施の意義—包摂的な環境の実現に向けて」 『音楽芸術マネジメント』 第14号、pp.11-24
- 船越理恵・萩原史織 (2024) 「社会包摂を志向したアウトリーチに取り組む演奏家の意識—質問紙調査の分析を通して—」 『音楽文化の創造 (CMC)』 電子版 Vol.31
- 町田佳代子 (2019) 「質的研究におけるテキストマイニング活用の利点と留意点—活用研究の検討と頻出単語の特徴をもとに—」 『札幌市立大学研究論文集』 第13巻第1号、pp.47-53
- 湯原悦子・石川貴憲 (2022) 「社会福祉領域における音楽アウトリーチの効果に関する探索的研究」 『日本福祉大社会福祉論集』 第147号、pp.59-80
- 吉本光宏 (2001) 「アートと市民・子どもをつなぐ『アウトリーチ活動』—芸術による社会サービスの可能性」 『ニッセイ基礎研REPORT』 第55号、pp.2-7
- 渡辺由美子 (2018) 『子どもの貧困』 水曜社

附記

本研究はJSPS科研費 (課題番号: 23K00233) の助成を受けた研究の成果の一部である。